

モルトマンの三位一体論における空間的理解

— 希望の神から内住する神へ —

沖野政弘*

Das Raumverständnis in der Trinitätslehre Moltmanns

— Vom Gott der Hoffnung zum einwohnenden Gott —

Masahiro OKINO*

モルトマンが最初に三位一体論の空間的理解を展開したのは『神の到来—キリスト教的終末論』(1995年)においてであった¹⁾。続いて最後の組織神学論叢『神学的思考の諸経験—キリスト教神学の道と形』(1999年)²⁾、2001年4月に開催されたゼミナール(Bad Boll)の基調講演「神と空間」³⁾、さらに論文「創造における神のケノースと世界の完成」(2001年)⁴⁾等のなかでも三位一体論における空間的理解の主題について、詳細にわたって展開されているのである。前期モルトマンが『希望の神学—キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究』(1964年)を出発点にして、歴史的・時間的カテゴリーを中心にして神学を展開してきたのにたいして、このことは後期モルトマンが空間的・場所的カテゴリーを中心にして神学を展開していることを示している。『十字架につけられた神』(1972年)と『三位一体と神の国』(1980年)のなかで、モルトマンは十字架の神学に基づく三位一体理解を社会的三位一体論として展開した。しかし『創造における神』(1985年)以後には、彼は、人間の歴史は大地の生態学的条件下において起こっていることを自覚せざるをえなかった。彼は前期の立場から後期の立場へのこのような推移と広がりやを次のように説明している。

「私の初期の神学的世界は抵抗と約束、約束と脱出、脱出と解放のような預言的構想によって決定されていた。『希望の神学』以来、約束の論理と神の到来の待望が私の神学的思考を形成していた。あの数年には多くの人たちが、歴史の動態(ダイナミック)における神の現臨について、神の歴史的行為について語った。空間ではなく時間が歴史のカテゴリーを支配しているので、神

* 大阪電気通信大学工学部教授

の約束と積極的な人間の希望の歴史的理解の枠組みのなかでは、神はいわば時間に内住していた…生態学的創造論と社会的三位一体論の研究以来、私は一方的に時間的に方向づけられた神学的世界を空間と故郷、シェキナーと相互内住、相互内住と互いのなかで落ち着く等の概念をめぐって広げようとした⁵⁾。

たしかに人は時代と共に歩み、時代を先取りすることもできる。しかし人は時代のなかに留まり、時代のなかに住み休むことはできない。時代と時は静止してくれないからである。これにたいして歴史を現実全体の象徴として理解している人は、歴史と自然を分離するか、それとも自然をも歴史化するか、あるいは歴史を自然化する道を模索せざるをえないであろう。たしかに前期モルトマンは自然の歴史化の道を歩んでいたのであるが、最近のモルトマンは空間と場所、方向づけと留ること、空間の広がり（Weite）と境界（Grenze）等の概念を中心にして「神と空間」の主題を追求しているのである。すでに19世紀においても、自然の人間化と人間の自然化とを結びつける試みが若いマルクスによって行われた。しかし20世紀の神学史のなかでも、人間中心主義によって基礎づけられた人間の歴史と大地の自然の歴史との間の分岐は、K.バルトとR.ブルトマンによって克服されることはできなかった。

そこでモルトマンは、「神と空間」の主題を論究する動機を次のように説明するのである。「私たちは世界経験において、時代的諸空間と空間的諸時代にたどりつき、生活経験において、諸運動空間と生活空間にたどりつく。諸空間を神において神を諸空間において考慮する時には、神経経験は私たちをどのような空間へ導き、私たちはどのような神表象にたどりつくのであろうか⁶⁾。

もともと現在（Gegenwart）は時間のカテゴリーだけではなく、空間のカテゴリーでもある。たとえば居合わせていること（Presence）の反対は不在（Absence）である。私たちは、精神によってばかりでなく体によって居合わせているのであり、諸空間を体によって、その運動と感覚によって、とくに平衡感覚によって経験している。さらにすべての事物には時と時代があるように、その事物はその中に存在している空間をもっている。そしてこれが生態学的空間である。どの生物も、その特殊な生息する空間と場所をもっている。逆にその空間と場所が、その生物の特性を形成している。水が水生動物を形成しているように、地域の景観とか地勢が地域住民とその生活様式を形成している。それゆえ人間の生活には生活空間が、人間の自由には自由行動の余地が、運動には運動空間が、音響には音響空間等が属しているのである。

そしてモルトマンによれば、人間はこれらの諸空間を広がり（Weite）と境界（Grenze）として経験している⁷⁾。広い空間は自由の象徴であり、地平線の彼方まで眺められる広い空間は、境界のない大地の招きでもある。ところがその広い空間と場所に滞在して住み眠ることができるためには、私たちは取り囲まれた空間と場所とを必要としている。私たちは内と外、わが家と無気味なところ、故郷と見知らぬ地との間を区別する境界をも必要としている。私たちには居住空間と保護空間が必要なのである。このような意味において広がりとは境界は私たちの生活において共に属しているものである。

ところで他の生物と同じように人間も環境世界に束縛され、環境世界によって生活様式が決定され形成されている。しかし他の生物と相違して、同時に人間は世界に開かれた開放的存在 (Weltoffenheit) でもある。それにもかかわらず人間は、神のように常に世界開放的存在であるのではない。広がりや境界が共に属しあっているように、境界内においてのみ人間は世界開放的存在である。そして具体的に、この境界を象徴しているのが住居と住宅である。住居と住宅のない人間の生活はありえない。住居と住宅が象徴している保護空間という意味において、住居と住宅が生活に先立っているからである。さらにこの生活空間は、地域的・風土的・生態学的な意味においてばかりでなく、社会的・道徳的な意味においても理解されている。たとえば生態学的空間において、私たちは環境の調和に方向を定める。社会的空間において、社会的正義と呼ばれる生き方の調和とバランスに方向を定める。道徳的空間においても、モーセの十戒からカントの定言的命法に至るまでの道徳法に方向を定めるのである。もともと人間の現存在は世界内存在 (Sein in der welt) であり内存在 (In-sein) である。私たちは住居内に、社会のなかに、国内に、世界内に存在している。どの胎児も母胎内で育成し、生まれた子供は誕生後は家族のなかで成長していく。その後の親が生きていく希望も、子供が成長していくなかにある。それゆえモルトマンは、このような家族的・社会的空間を相互内住的 (perichoretisch) と呼ぶのである。

このような相互内住的空間の諸経験から出発してモルトマンは、イスラエルの捕囚と捕囚後の神学に由来するシェキーナー (神の内存在) の構想を展開するのである⁸⁾。なぜなら神と空間との結びつきがユダヤ教神学のなかに見出されるからである。「広い所」(Mocom) である聖なる空間が神の名にもなっているからである。聖なる空間にたいする表現 (Macom kadosch) は神の内存在する聖なる区域を意味している。ここで「広い所」は神の遍在の意味において用いられている。

「あなたは後から、前からわたしを囲み、わたしの上のみ手をおかれます…わたしはどこへ行って、あなたのみ前からのがれましょうか」(詩編139:5-7)。

しかし被造世界へ限定された神の現臨という意味において、神は以下のように神は世界の「広い所」としても理解されている。

「神はあなたを悩みから、束縛のない広い所に誘い出された」(ヨブ36:16)。

この「広い所」は救いの空間であり、ありのままの神の現臨する空間であり、救済された被造物が神の内に見出す生活空間である。救済するというヘブライ語 (jasa) は、文字どおり空間を与えることを意味している。そしてこの空間こそ、人間を自由にして解放する「広い所」なのである。

「わたしはどこへ行って、あなたのみ前をのがれましょうか。わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます」(詩編139:7-8)。

ここでも「広い所」は際限のない神の遍在の意味において用いられているが、被造世界へ限定された神の現臨の意味においては、世界の「広い所」としても用いられているのである。それゆ

えにユダヤ教のミドラシュ（ユダヤの正典解釈）のなかで「神が世界の空間なのか、あるいは世界が神の空間なのか」、と問われているのである。ラビの答えは次のとおりである。「主なる神が世界の居住空間であるが、しかし世界が神の居住空間ではない」⁹⁾。それにもかかわらず、神の内住（シェキナー）とキリスト教の受肉論に従うなら、私たちは、無限なる神が有限な被造世界に住まれ、それを神の居住空間にしておられる秘義について語らなければならない。しかも新約聖書のキリスト論形成にとっても大きな影響を与えている背景がシェキナー神学のなかに見出されるのである。

「ことばは肉となって、わたしたちの間に宿られた」（ヨハネ1：4）。「キリストの内には、満ちあふれる神性が、余すところなく宿っている」（コロサイ2：9）。「あなた方の体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿である」（1コリント6：19）。このようにキリストの受肉と内住は神のKenosis（神のへりくだり）であり、このケノーシスによって、無限なる神が被造世界の有限な存在において内住することができるのである¹⁰⁾。

神は主体であるばかりでなく、御自身を明け渡して救済する居住空間であり生活空間でもある。神は世界の居住空間であり生活空間であり、被造物の運動空間でもある。なぜそうなのであろうか。「神は被造世界の空間を、内三位一体の本質のなかに含まれた可能性のために造られたからである」¹¹⁾。ここでモルトマンは聖書の相互内住（Perichoresis）の意味を引き合いに出すのである。「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられる」（ヨハネ14：11）。

そして「相互内住の名詞は渦とか回転を意味し、その動詞はある場所から他の場所へ運動する、回す、歩いて回る…包みこむ等を意味している」¹²⁾。ダマスコスのヨアンネスによれば、相互内住はキリスト論において、キリストの神性と人生との相互浸透を描写している。相互内住は三位一体論において、父と子と霊の同一本質（Homousios）の位格の相互内住を表している。それゆえモルトマンによれば、父と子と霊はひとりの方（einer）ではなく、相互内住においてひとつ（eins）ということになる。これは要するに、神の三位格の相互内住こそが、神の三位一体的な仕方での一体性を表しているということである。それゆえキリスト論におけるキリストの神性と人性の相互浸透と、三位一体論における三位格の相互内住こそが、同種の他者ばかりでなく一つの種の他者をも混合することなく、欠けることなく、分離することなく結びつけることができるということである。そこでモルトマンは、相互内住の状態の実り豊かさを次のように表現するのである。「神の三位格は相互内住を、同形的愛（homologe Liebe）によって形成しているのであるが、神人における神性と人性は異形的愛（heterologe Liebe）の力によって結びつけられているのである」¹³⁾。

この相互内住のラテン語訳は（circumincessio）と（circuminsessio）であり、前者はダイナミックな浸透（incedere）を、後者は安らぐ内住（insedere）を描写している¹⁴⁾。ここでモルトマンは、この二つの意味が完全に表現されていることを示すために、西方教会と東方正教会のエキューメニカルな統合に仕えるフィレンツェ公会議（1438－1445年）の教義学決定を引用するの

である。

「この一体性のゆえに父は全く子の内にあり、全く聖霊の内にある。子は全く父の内に入り、全く聖霊の内にある。聖霊は全く父の内に入り、全く子の内にある。三位格のどれ一つとして永遠性において他に凌駕しないし、偉大さにおいて優れることなく、力において勝っていない」¹⁵⁾。

この教義学的決定が定式化しているように、相互内住的一体性において、ひとつの位格の他の位格への優位はなく、三位格は平等であり、階層秩序（ヒエラルヒー）のない交わりと共同体（Gemeinschaft）である。それゆえ父と子との一体性において、この一体性のための絆（アウグスティヌス）が聖霊であるのではない。このような理解は三位一体を二位一体に還元し、聖霊の位格性を奪ってしまうのである。これにたいして、この教義学的決定においては、ダイナミックな相互浸透と安らぐ内住によって運動と休息とが同時に示されている。すなわち、どの位格も二つの他の位格において動いていることが示されている。三位格は、互いに永遠のいのちを展開することのできる諸運動空間である。同時にどの位格も、二つの他の位格において脱自的に安らぎ内住している。つまり三位格は、互いにおいて相互に安らぐことのできる諸生活空間でもある。全く御自身から出て、全く他において内住し存在しているのが神の愛であるからである。父は子と霊において御自身へと来られ、子は父と霊において御自身へと来られ、霊は父と子において御自身へと来られるからである。それゆえモルトマンは神の愛を、三位一体的忘我（die trinitarische Ekstasen）とも呼ぶのである。さらに相互内住の力によって、三位格は一体性へと結びつけられるのであるが、同時に互いにたいしては次のように区別されるのである。「二つの他の位格への相違する関係によって、父は子と霊との間を区別する。父と霊への相違する関係によって、子は父と霊との間を区別する。父と子との相違する関係に基づいて、霊は父と子との間を区別する」¹⁶⁾。

三位格は位格であるばかりでなく、互いのための諸空間でもある。どの位格も二つの他の位格のための、同時に運動空間・生活空間・居住空間である。どの位格もそれ自身を、相互内住の力によって他の位格のために居住可能にしている。これが三位格の安らぐ内住（circuminsessio）の意味である。それゆえ三位格についてばかりでなく、同時に三位格の相互内住的空間についても語られなければならない。どの位格も他の位格に内住しながら、同時に他の位格のために空間を明け渡している。それゆえフォン・バルターザールが理解しているように、三位格は互いに譲渡しあっているだけではない。さらに三位格は、互いにたいしてもいのちと運動空間・生活空間を明け渡し、それ自身を他の位格のための居住空間にしているのである¹⁷⁾。

神が被造世界の居住空間となる。この主題を論じるために、モルトマンは『創造における神』の中でイサク・ルーリアのツィムツム（神の収縮）、被造世界のための神の自己限定の思想を取りあげていた¹⁸⁾。この思想によれば、被造世界を御自身と共に御自身において存在させるために、神は空間を明け渡し、場所を譲渡し、御自身を撤収された。ユダヤ教の神秘的聖書解釈法であるカバラのツィムツム思想によれば、原初的にすべてを満たしていた無限なるものは永遠の光を撤

収し、空虚な神の存在しない空間を造られた。この永遠の光の自己限定によって空虚な空間が生じ、創造者が非存在を存在させることのできる無が生じたのであり、このことが無からの創造 (creatio ex nihilo) であった。御自身の現在を収縮することによって、神は世界を創造された。子供を産む時の母親の痛みと子宮の収縮 (ツィムツム) のように、御自身を収縮し撤収することによって、神は世界を創造し空間を与えられた。御自身から外へ出られるために、神は御自身の内へと働きかけ、御自身を収縮し撤収された。偏在される空間を制限することによって、神は最初に被造物のために生活空間を御自身において明け渡された。神は御自身を、被造物のための居住空間にされた。天と地の創造者となられる前に、全能の神は御自身を、すべての被造物を受容し万物を受け入れることのできる空間にされた。

ところでこれらの神の自己撤収、自己限定と自己譲渡は、神の遍在と全能を表現している。遍在と全能の神だけが御自身を撤収し明け渡すことができるからである。無である神だけが遍在であり全能であるからである¹⁹⁾。しかもこの無である神だけが、創造されたものの特性と自由とを尊重することができる。絶対的なものの相対的否定である無だけが、相対的なものの特性と自由とを初めて可能にすることができるからである。全能を限定することによって、神は被造物に自由な空間と自由行動の余地を与えられた。さらに全知を限定することによって、神は被造物がどのように決心し、どこへと発展していくかを予知することはおできにならない。ただ被造物に時間と空間を与えることによって、神は被造物にも予見することのできない将来 (Zukunft) とまだ現在は場所のないユートピア (U-topie) を開いておられるのである²⁰⁾。

しかし何のために神は、被造物に空間を与え、永遠的存在を限定して無化してまでも被造物の空間を可能にされたのであろうか。それは被造世界が神の居住空間となるためである。そしてモルトマンは、このことをより具体的に時の中の安息日における神の現臨の中に、神の義が住むあの地の中に、天と地において神が内住する救済史等の中に見ている。神のイスラエルとの契約「わたしはあなたがたの神であり、あなたがたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」(出エジプト20：2-3)には、「わたしはイスラエルの人々のうちに住んで、彼らの神となるであろう」(同29：45)というより内容豊かな約束があるからである²¹⁾。

古代イスラエルにはヤハウェが住む契約の箱があった。ダビデはそれをエルサレムに運んだ。そこでソロモンは、その至聖所に宮殿を建てた。この宮殿の破壊後と民の捕囚の時代にも、神のシェッキナーは民と共に捕囚へと赴き、無力な民の同行者と同伴者となられた。見下げられ異国の地へ行こうとも、神のシェッキナーは民のもとに住んでいる。この神のシェッキナーの民のもとでの内住を顧慮するなら、神はどこにいますか。ここでもモルトマンはイスラエルのシェッキナー経験から、ひとりの神の両極的神学 (bipolare Theologie) を展開したA. ヘッセルとF. ローゼンツヴァイクのシェッキナー解釈とを引き合いに出すのである。歴史の中で神は二重の現在において、つまり天と捕囚された民において、無限定と限定において、無限と有限において、苦しみと死と、それからの解放においています。「わたしは高く聖なる所に住み、

また心砕けて、へりくだる者と共に住む」(イザヤ57:15) 他方ローゼンツヴァイクはイスラエルのシエッキナー経験、ヘーゲルの弁証法を援用することによって、神における自己差異として解釈している。神は御自身を御自身から切断された。そうすることによって、神は御自身を民に与えられた。神は民の苦しみを共苦された。神は民の旅を共に旅された。そしてローゼンツヴァイクは、民との交わりにおいて御自身も贖いを必要とする、追放された神の苦しみについても語っている。この神の贖いは、民と共に旅に出かけたシエッキナーの、神の充満への帰郷であり、御自身から切断された神が再び結びつけられることである。「神がすべてにおいてすべてとなられる」時には、神は究極的に贖われ結びつけられる。すると天と地が神の住まわれる所となるのである²²⁾。

さらにシエッキナー神学は、キリスト論と聖霊論におけるキリスト教的神経験の基礎にもなっている。「そしてことばは肉体となり、わたしのうちに宿った」(ヨハネ1:14)。「キリストの内には、満ちあふれる神性が余すところなく、見える形をとって宿っている」(コロサイ2:9)。キリストの交わりにおける神経験においては、神の内住はナザレのイエスの体、名と姿と結びついている。「ことばは、自分の民のところへ来たが民は受け入れなかった。しかし、ことばは、自分を受け入れた人、その名を信じた人々には神の子となる資格を与えた」(ヨハネ1:11-12)。貧しい人と名もない人々のもとでイエスは住居を見出された。このように被造世界に住み休息し留るために、創造者は被造世界へ入って行かれた。

キリスト教神学は、肉となられたことばを顧慮してその受肉(incarnatio)について語り、聖霊を顧慮してその内住(inhabitatio)について語ってきた。ことばはいのちとなり、聖霊は内住する。神の子は人間となり、聖霊はイエスとの交わりにおいて新しいいのちを生きる人たちに内住する。すると神の終末論的将来が開かれてくる。「主の栄光は全地に満つ」(イザヤ6:3)。「キリストは…すべての権威と権力を打ち滅ぼして、御国を父なる神に渡される…神がすべてのものであって、すべてとなられるためである」(1コリント24:28)。全被造世界は終末論的に永遠の神の住居と生活空間となり、宇宙的神の神殿となる。

ここで私たちは、既に見たユダヤ教ミドラシュの中の問い「神が世界の空間なのか、あるいは世界が神の空間なのか」の前に再び立たされるのである。モルトマンによれば、神は世界の居住空間であるが、世界は神の居住空間ではないと理解する人は、旧約聖書のシエッキナー神学を破棄してしまっている。フォン・バルターザールとK.バルトのように、世界は神の内にあるが、神は世界の内になく到来して現臨することもないと理解する人は、新約聖書の受肉のキリスト論を破棄してしまっている²³⁾。

既に見た神のツィムツム(神の収縮)とシエッキナー(神の内住)の両者に対応しようとするなら、ユダヤ教ミドラシュの問いの両方が固く保持されなければならない。そしてこのことこそ、キリスト論におけるキリストの神性と人性との相互浸透に、そして三位一体論における神の三位格の相互内住(Perichoresis)に対応していることなのである。しかしさらに、神と世界と

の相互浸透と相互内住は、キリストの神性と人性の相互浸透に、そして三位格の相互内住に対応しながらも、同じではないものの相互浸透と相互内住であり続けるのである。世界は世界の仕方
で神に内住し、神は神の仕方
で世界に内住している。神と世界は、相互浸透と相互内住において混合することなく、世界が神の中へ解消されることなく、しかも分離されることなく相互に浸透し内住しあっている。そうすることによって、世界と神のもろもろの隔りと距離は、あたかも火と燃えているのに燃えつきない柴のように、また火と火の熱にも溶けない鉄のように相互に浸透し内住しあっていて、寄せ集められて一体化している。「愛にとどまる人は神の内にとどまり、神もその人の内にとどまっているからである」(1ヨネ4:16)。さらにそうすることによって、神は人間の生活空間・居住空間・自由行動空間となられ、人間も終末論的には、神の生活空間・居住空間・自由行動空間となるのである。人間の愛が限りもなく歓喜するところ、そこには神がいますからである。

注

- 1) 『神の到来—キリスト教的終末論』蓮見和男訳440—457頁第4節 神の現臨における空間の終り
1 創造の空間 2 神の住まいの歴史的空間 3 神の現臨における空間の成就(新教出版社)。これについては拙著『現代神学の動向—後期ハイデガーからモルトマンへ—』297—301頁参照(創文社)
- 2) 『神学的思考の諸経験—キリスト教神学の道と形—』沖野訳(新教出版社)
- 3) Jürgen Moltmann, "Gott und Raum" (Bad Boll 2001年4月) 筆者はこの基調講演をセミナーに出席された蓮見和男氏からいただいたことを感謝している。S.1-19 なおこの講演は現在は"Wissenschaft und Weisheit" S.131-147の中に入れられている。
- 4) Jürgen Moltmann, "God's Kenosis in the Creation and Consummation of the World" in "The Work of Love-Creation as Kenosis" Ed. by J. Polingshorne, P.137-151 (Eerdmans). なおこの論文も現在は"Wissenschaft und Weisheit" S.68-82の中に入れられている。
- 5) 『神学的思考の諸経験』381—382頁以下『神学的思考』と略記。"Gott und Raum"の中でも導入のテーマが「希望の神から内住する神へ」となっている。この基調講演の中で後期モルトマンの立場は次のように説明されている。「人間の歴史は地球の生態学的条件のもとで起っていることが、ローマクラブ(1972年)によって明らかにされた。このことによって、人間的発展に限界があることが私たちに自覚された…私たちは、歴史の未来も限定されない諸可能性の領域ではないことを悟らざるをえなかった」S.1—2
- 6) Gott und Raum, S.2
- 7) Ibid, S.4
- 8) シェッキナーの構想については以下のモルトマンの著書と論文も参照『いのちの御霊』蓮見・沖野訳79頁以下『神の到来』391頁以下 "The Work of Love" P.142-144
- 9) Gott und Raum, S.7 『創造における神』沖野訳227頁
- 10) 筆者はこのことを『現代神学の動向』223—235頁 第11章「モルトマン神学における汎内神論」の中で論じている。

- 11) D. Staniloae., Orthodoxe Dogmatik, I S.189 Vgl. Gott und Raum, S.8『神学的思考』469頁
参照
- 12) 『神学的思考』384頁 Gott und Raum, S.9
- 13) 『神学的思考』385頁
- 14) 『神学的思考』385頁 Gott und Raum, S.8
- 15) 『神学的思考』386頁 Gott und Raum, S.8-9 "The Work of Love"P.141
- 16) 『神学的思考』389頁 Gott und Raum, S.9 "The Work of Love"P.141
- 17) Gott und Raum, S.9
- 18) 『創造における神』35-46頁 『現代神学の動向』224-227頁参照
- 19) 「全能の力だけが、それ自身を限定することができ、受容したものを独立させるために、自らを与えて撤収することができる。自己限定の行為におけるほど、神は強いお方として現われることはない…神の全能の力は、全能の苦しむ忍耐の中に見出される。全能であるのが神の力ではない。全能であるのは神の愛なのである」(The Work of Love, P.148-149)
- 20) Ibid., P.142
- 21) Ibid., P.142-143 『神学的思考』132頁
- 22) Ibid., P.143-144
- 23) Gott und Raum, S.15